九州のキリスト教シリーズⅡ

南蛮の鼓動

―大分に残るキリシタン文化―

九州のキリスト教シリーズⅡ

南蛮の鼓動

—大分に残るキリシタン文化—

2010

5.27(木)~7.3(土)

西南学院大学博物館

西南学院大学

ごあいさつ

フランシスコ・ザビエル来航以降、九州各地にはキリスト教を布教するための多くの関連施設がつくられました。教育機関であるコレジオやセミナリオなどという言葉は、一度は聞かれたことがあるかもしれません。これらはいまなお、当時のキリスト教文化を感じることができる史跡や文化財として残されています。

日本に残されているキリスト教文化遺産には、キリスト教伝来と布教、信仰によって文化的飛躍を遂げた“栄華の時代”と禁教政策により弾圧を受けた“悲劇の時代”が混在しています。こうしたキリスト教史の光と影の部分が、現在でも九州には色濃く残っています。九州はキリシタン大名が誕生するなど、キリスト教信仰の強い地域にあたります。なかでも大分は、キリスト教布教に熱心だった地域のひとつで、領主である大友宗麟は積極的にキリスト教を保護し、自らも洗礼を受けています。その結果、大分にはキリスト教の影響を受けた華やかな“南蛮文化”が芽生えました。

こうした九州のキリスト教文化を紹介する「九州キリスト教シリーズ」では、前回、島原半島でのキリシタン弾圧の実相や島原・天草の乱の歴史的意義を取り上げました。今回は大分で花開いた南蛮文化にスポットを当てた「南蛮の鼓動－大分に残るキリシタン文化－」展を開催することになりました。

本展覧会は、キリシタン大名として有名な大友宗麟の時代の豊後府内の様子や、フランシスコ・ザビエル来航以降栄えた南蛮文化について紹介するものです。キリスト教伝来にともなって、日本にこれまでなかった異国情趣あふれる新しい文化が生まれます。こうした華やかな文化とともに、府内に居住した人たちがキリスト教を信仰していた姿や豊後府内の海外交流の実態を示す数多くの資料を展示いたします。本展覧会を通じて、当時の人々の信仰の実像に加え、一世を風靡した南蛮文化を直接感じていただければ幸いです。

本展覧会開催にあたり、大分県教育庁埋蔵文化財センター、大分県立歴史博物館、大分市歴史資料館、津久見市からご支援を受けました。ご協力いただきました関係各位に対しまして、ここに衷心より御礼申上げます。

2010（平成22）年5月27日

西南学院大学博物館
館長　髙倉　洋彰

開催趣旨

1549(天文18)年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸すると、日本にキリスト教がもたらされる。大分には1551(天文20)年に大友義鎮(宗麟)が山口滞在中のザビエルを招聘したことから布教がはじめられた。ザビエルは府内に2ヶ月程滞在したが、大友領に布教のあしがかりとなる大きな足跡を残した。

その後、大友宗麟は自らも洗礼を受けてキリシタン大名として積極的にキリスト教を保護している。これにともない、豊後には多くのキリスト教関連施設が創設され、日本布教の中心地となった。また、南蛮貿易を通じて多くの文物が行き交い、大分に“南蛮文化”が芽生える土壌が形成された。これまで日本にはなかった南蛮文化の創出は、多くの日本人を刺激することになった。

大分では今日でも大友府内町を中心に発掘調査がすすめられ、一定の成果が挙げられている。ここでは、キリシタン信仰を示すメダイや指輪、中世大友氏の海外交流を示す遺物が数多く発掘されている。本展覧会では、こうした禁教以前に繁栄したキリスト教文化の実像やキリシタン大名である大友宗麟の事跡を紹介するとともに、豊後府内におけるキリシタンの信仰の姿に迫まっていく。

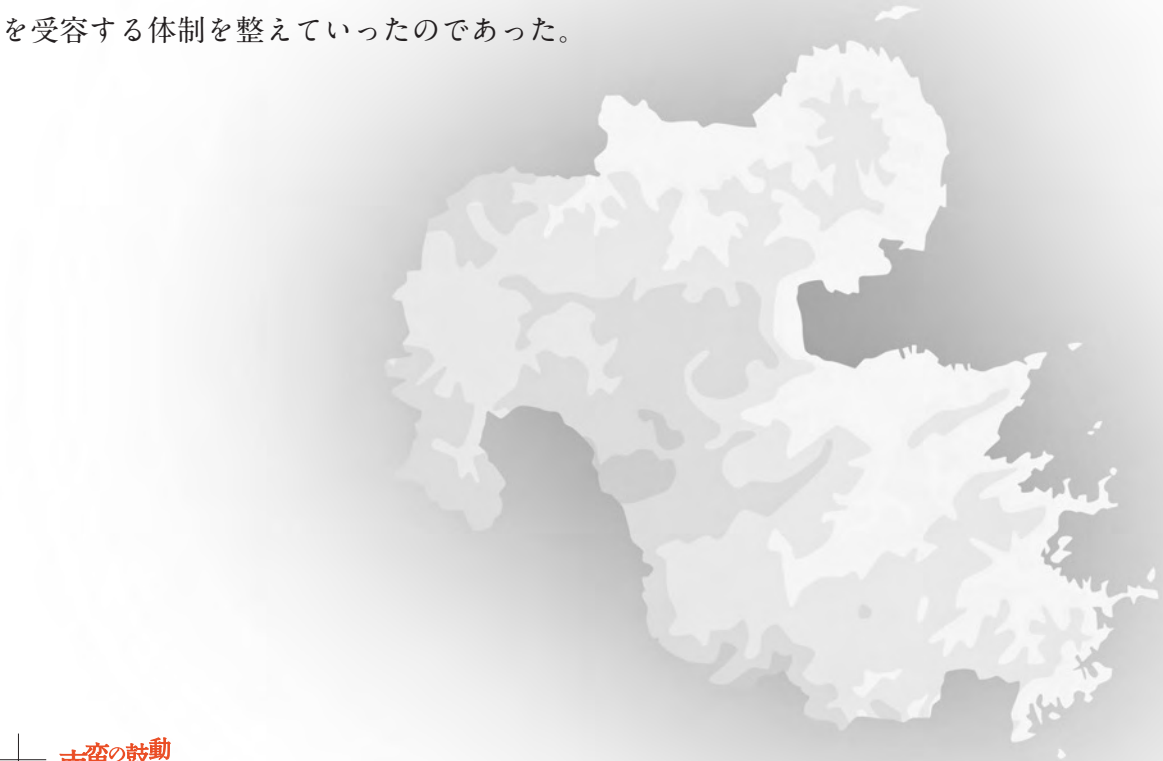
豊後国とキリスト教

豊後国とキリスト教の関係をみると、大友義鎮(宗麟)がフランシスコ・ザビエルを招聘した1551(天文20)年からはじまる。府内を訪れたザビエルは、最高の礼を以って迎えられ、義鎮もキリスト教に対して深く興味をもつことになった。ザビエルの府内での滞在期間は約2ヶ月間であったが、翌年にガゴ神父が府内に訪れて布教をおこなう基礎をつくった。

1555(弘治元)年、外科医でもあるアルメイダは、貧しい人たちがおこなっていた間引きを防ぐ目的のために育児院を設けた。また、1557年には布教長トルレスとともに府内病院を設立して外科治療を開始。ここでは西洋医術がおこなわれていた。府内病院では眼科や産科の診療もおこなわれていたのではないかと推測されている。

1579(天正7)年、ヴァリニャーノが来日し、その翌年には豊後を訪れる。大友宗麟との会見やイエズス会宣教師らとの協議会をかさね、1580(天正8)年臼杵にノビシャド(修道院)、1581(天正9)年には府内にコレジョが設けられるにいたる。さらに宣教師が駐在するために野津・由布にはレジデンシヤ(住院)が置かれ、これはその後、志賀や高田にも設けられていった。布教活動が広範囲になるにともない、多くの関係施設が豊後各地にはつくられていったのである。

このような豊後国での布教活動が広域でおこなわれていった背景には、大友宗麟によるキリスト教の保護がある。ポルトガル船を通じておこなわれる南蛮貿易により得られる利益から自領が繁栄することはもとより、1578(天正6)年には臼杵の教会で自らも授洗(フランシスコ)して、領国内にキリスト教を積極的に取り入れたのである。宗麟は公的文書でも「府蘭」や「普蘭師司怙」などと名乗るほど、キリスト教に熱心な姿勢を示している。また、日本を紹介するために、ローマに天正遣欧使節を派遣するなど、国内にとどまらず対外的にもキリスト教を受容する体制を整えていったのであった。



目　次

ごあいさつ

西南学院大学博物館　館長　髙倉　洋彰　2

開催趣旨　3

豊後国とキリスト教　4

目次・凡例　5

本編

Ⅰ．大友宗麟と豊後府内　6

Ⅱ．南蛮文化の精華　13

Ⅲ．受容と信仰　28

Ⅳ．大友府内の交流　31

豊後国とキリスト教関係年表　35

論考

寄稿「府内の教会とキリシタンの文化」

東京大学名誉教授　五野井　隆史　37

「豊後国における絵踏み－臼杵藩と岡藩を中心に－」

西南学院大学博物館学芸員　安高　啓明　41

謝辞・講演会・参考文献　46

出品目録　47

凡例

◎本図録は西南学院大学博物館特別展「南蛮の鼓動－大分に残るキリシタン文化－」〔2010（平成22）年5月27日（木）から7月3日（土）〕開催にあたり、作成したものである。
◎図版番号は出品目録番号に対応するが、展示順番とは必ずしも一致しない。
◎本図録の資料解説および編集は安高啓明（本学博物館学芸員）がおこない、英文翻訳ならびに編集補助には、貞清世里（本学大学院国際文化研究科博士後期課程）、早瀬遼子（本学大学院国際文化研究科博士後期課程）、平川知佳（本学大学院国際文化研究科研究生）、中松沙織（本学大学院国際文化研究科研究生）、吉村陽子（本学大学院国際文化研究科研究生）、中尾祐太（本学大学院国際文化研究科博士前期課程）、小林史奈（本学大学院国際文化研究科博士前期課程）があたった。

I 大友宗麟と豊後府内

大友宗麟(義鎮)は豊前·豊後など六ヶ国の守護大名で、キリスト教を熱心に保護した人物として知られている。宗麟自身も1578(天正6)年に臼杵で洗礼を受けており、これ以降「ＦＲＣＯ」の朱印を使うようにもなる。領主による積極的なキリスト教の受容があって、豊後はキリスト教布教の上で重要拠点とされた。そこで、領内にはノビシャド(修道院、臼杵)、コレジオ(神学校、府内)が建てられるなど、教育機関の整備もすすめられていった。また、天正遣欧使節の派遣に関与し、日本におけるキリスト教の布教は豊後国から支えられたともいえる。府内においてもヨーロッパ式の時刻や曜日、暦の考え方がもちこまれるとともに、キリスト教風の婚礼や葬式がおこなわれることによって、"南蛮" 様式の土壌が築かれたのであった。

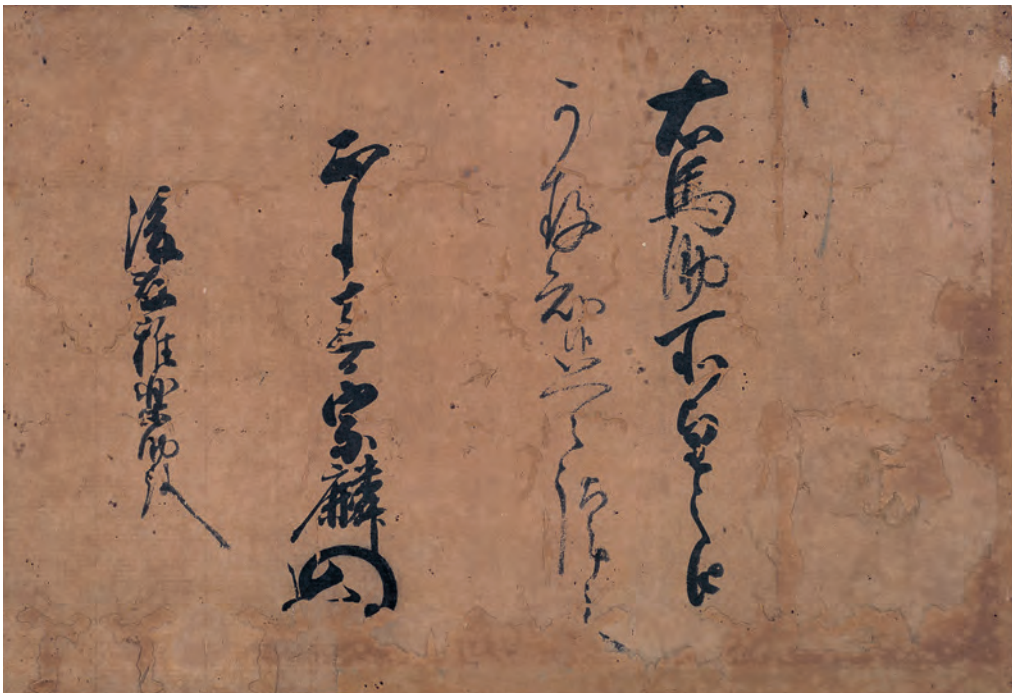
1. 大友宗麟画像（複製）

安土桃山時代
津久見市

大友宗麟（1530-87）は豊後・筑後・肥後・筑前・豊前・肥前六ヶ国の守護で、キリスト教名はドン＝フランシスコ。宗麟は1551（天文20）年にザビエルを府内に招き、キリスト教の布教を許可すると、その後、積極的な南蛮貿易を展開する。ポルトガル船の度重なる来航により、大友領は物質的、文化的な富を得ることになる。1580（天正8）年には臼杵にノビシャド（修道院）、1581（天正9）年には府内にコレジョが設けられ、多くの日本人教育がおこなわれた。この画は瑞峯院の住職、怡雲宗悦が宗麟の死後まもなく菩提をとむらうために描かせたものである。

Portrait of OTOMO Francisco Sorin（REPLICA）

Otomo Sorin was called Don=San Francisco.　He permited Francisco Xavier to do missionary work in 1551, and he had started Western trade.



2. 大友宗麟官途状

安土桃山時代
津久見市

後藤雅楽助宛の官途状(官途書出)。主君が家臣にある官職に任命したことの証拠に書き与えた文書である。この文書では「右馬助」に命じていることがわかる。

Identification of appointment by OTOMO Sorin

This identification shows Otomo Sorin appointed Gotou Gagakunosuke as a breeder of the official horse.

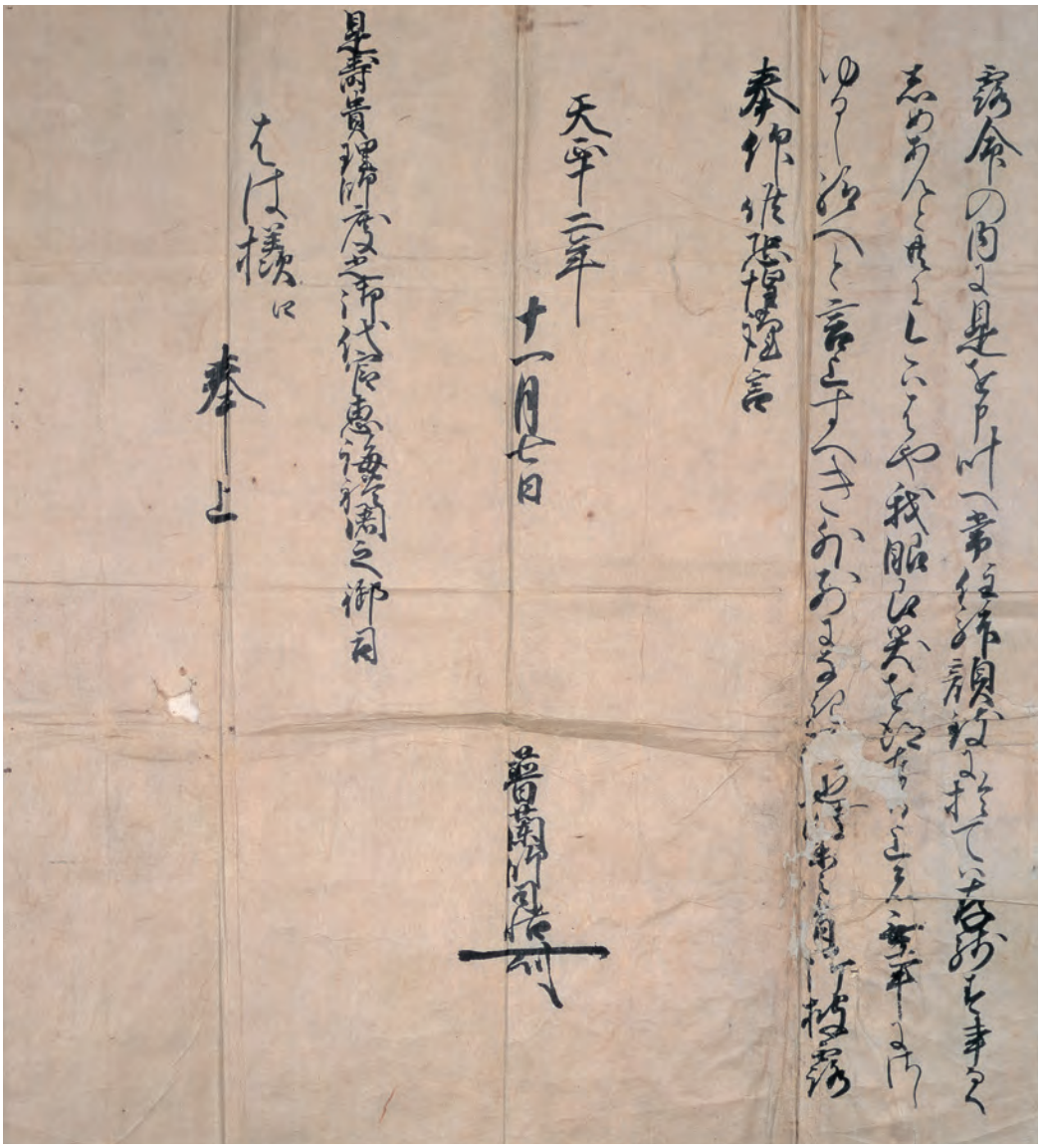
3. 短統(複製)

安土桃山時代
津久見市

1578(天正6)年4月に、大友氏と薩摩島津氏の両氏が交えた日向高城・耳川の合戦で、大友氏が使用したとされる短銃。この戦で大友氏は大きな損害を受けるが、合戦に勝利した島津軍は戦利品としてこの短銃を持ち帰ったと伝えられている。

Short gun(REPLICA)

A short gun used by Otomo-Shi at the battle between Otomo family and Shimazu family. Otomo-Shi suffesred heavy damage, and the winner of the battle Shimazu-Shi took it back as a pillage.



露命の内に是を申叶へ、常住拝顔致に於てハ存残す事なく、
しめあんと共に、今ハはや、我眼即笑を得奉る上者、無事にさし
ゆるし給へと言上すへき外、別になき□(者)也、此等之旨御披露
奉仰候、恐惶謹言

天正十二年
十一月七日　普蘭師司怙（花押）

是壽貴理師度之御代官恵誨禮闍之御司
はは様江
奉上

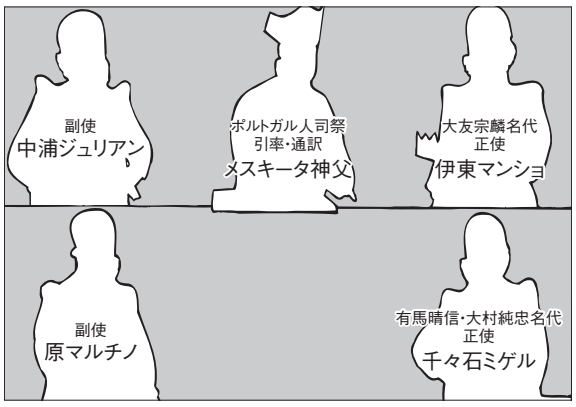
4. 大友府蘭（義鎮・宗麟）書状（複製）

安土桃山時代
津久見市

1584（天正12）年11月7日付の書状。大友宗麟が死去する3年前のものになる。宗麟の発給文書は非常に多く、これもそのひとつである。宗麟は署名する時、「府蘭」という名前で記していることが多いが、この書状には洗礼名で「普蘭師司怙」（花押）と記し、「はは様」（ローマ教皇）に宛てていることがわかる。

Letter of OTOMO Francisco Sorin (REPLICA)

Otomo Sorin issued this document in 1584. "府蘭*Furan*" is his Christian name and it was addressed to the Pope.



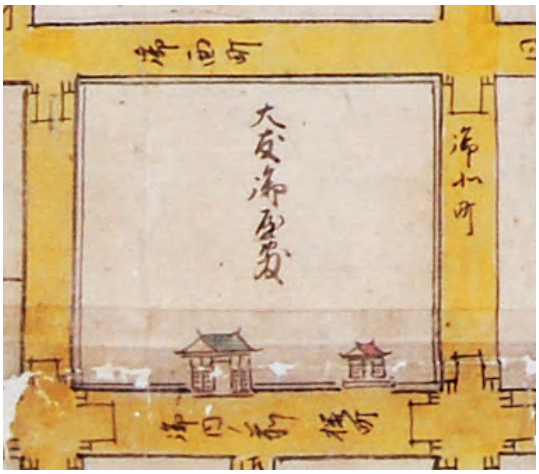
5. 天正遣欧使節肖像（複製）

安土桃山時代
津久見市

1582（天正10）年、キリシタン大名（大友宗麟・有馬晴信・大村純忠）の名代として伊東マンショ・千々石ミゲル・中浦ジュリアン・原マルチノがローマ法王のもとに派遣された。大友宗麟の名代としては伊東マンショが使節団の正使として遣わされている。バリニャーノ（ゴアまで）、メスキータが引率し、マカオ・マラッカ・ゴアを経由して、ポルトガルのリスボンに到着した。フェリペ２世と謁見後、スペインに入国。さらにローマに至り、法王グレゴリオ13世から公式謁見を賜った。ヨーロッパでは、天正遣欧使節の様子を伝える書物などが発行されたが、これは1586年にドイツ・アウグスブルクで発行された新聞に掲載された肖像画である。

Portrait of the delegation of Tensho youngsters (REPLICA)

They were delegated to the Pope by OTOMO Sorin in 1582, and received in audience by Gregorio XIII.



6. 府内古図

17 ～ 19世紀
大分市歴史資料館

1581 ～ 86（天正9 ～ 14）年頃の豊後府内の町の様子を描いた絵図。東の築地に大・小二つの門を構えた正方形状の大友館が描かれている。また、館を中心に東西・南北に道路が格子状に通され、それらの道路に沿って御内町・唐人町・桜町などの約40の町（両側町）が形成されていることがわかる。

Old map of Funai

The old map of the center of Oita Prefecture in 1581-86. There were about forty towns in this area.

7. 府内古図

17 ～ 19世紀
大分市歴史資料館

戦国時代の豊後府内の町を描いた絵図。作者の考証や「御蔵場」・「清忠寺」・「光西寺」など、他の絵図にはない多くの情報が載せられている。大友館は、築地の四方に１つずつ門が構えられた造りで表現されている。上部の大友御屋敷の西側には「キリシタンノコトタイウスドウケントク寺」とある。

Old map of Funai

The old detailed map of the center of Oita Prefecture in around 1500.

8. 府内病院想定復元模型

大分県立歴史博物館

1551（天文20）年、大友義鎮がザビエルを招聘すると、翌年にはバルテザル＝ガゴが大分に派遣され、布教活動がおこなわれる。ガゴ神父は、コスメ＝デ＝トルレスの指導を受けて、1553（天文22）年、大分市顕徳町に教会などを建てるとともに、布教活動の本拠地とした。また、ここでは外科をはじめとする西洋医学がおこなわれており、西洋医術の発祥地といわれる。1557年には、アルメイダが院長となり、日本初の洋式入院設備を整えた病院として多くの患者を診察した。

Imaged model of Funai Hospital

After Xavier's visit of Oita Prefecture, the hospital was built for missionary work by a mission.

II 南蛮文化の精華

1549(天文18)年にフランシスコ・ザビエルが来航すると、日本には多くの外国船が訪れるようになる。また、諸外国に日本が認識されたことによって、新たな海図が作られていった。これにあわせて日本には異国情趣ただよう文化の動きが生じてくる。ポルトガル人やスペイン人といった、いわゆる「南蛮人」の訪れは、当時の日本人の心を大きく刺激した。ここに文化的昇華が芽生え、異国の意匠をこしらえる「南蛮文化」が誕生する。南蛮船や南蛮人をモチーフとしたこれまでになかった新しい芸術が生まれたのであった。その後も府内に訪れる南蛮船の来航によって、まさしく南蛮文化が花開くことになったのである。

カピタン・モールたち

(参考)南蛮屏風

桃山時代
神戸市立博物館

日本と異国の港を一双とし、双方に南蛮船を配し、異国は出帆、日本は到着した場面を組み合わせている。左隻の出帆図では中国風の建物をベースにし、内部に救世主像や花クルス文様で飾られ屋根の頂上には聖体顕示台を転用した装飾がみられる。右隻にはカピタン行列を出迎える一行のなかにフランシスコ会士が混じっている。また、駿馬を連れて日本に上陸し、上部には南蛮寺が描かれている。作者の狩野内膳(1570-1616)は、豊臣家の御用絵師となった人物である。

Namban Screens

This Namban Screens shows the Japanese port and foreign port.

フランシスコ会士たち

聖体顕示台

INRI
SATISESTDNESATISEST
IHS
S·P·FRACISCUSXAVERIVSSOCIETATISV

9. 聖フランシスコ・ザヴィエル像（複製）

江戸時代初期
津久見市

イエズス会から西洋画の手ほどきを受けた絵師が、銅版画を手本にして描いたものと考えられる。ザビエルが列聖された1622（元和8）年より後に礼拝画として制作したと推定されている。両手を胸の前で交差させ、右手には燃え上がる心臓、十字架（磔刑のキリスト）を持っている。ザビエルの目線は右上の天に舞う複数の智天使（ケルビム）に向かっている。ザビエルの口元には「SATIS EST DNE（DOMINE） SATIS EST」（十分です。主よ、十分です）と記されている。交差する両手は祈り、燃え上がる心臓は神への愛を示しているといわれる。ザビエルは1549年に鹿児島に上陸後、平戸、京都、山口、大分などをまわり、1551年10月に日本を去っている。なお、本図は神戸市立博物館で所蔵されており、原品は国指定重要文化財となっている。

Portrait of St.Francisco Xavier（REPLICA）

This portrait was painted as the picture of service after Xavier's death. His hands and burning heart represent a prayer and love to God.

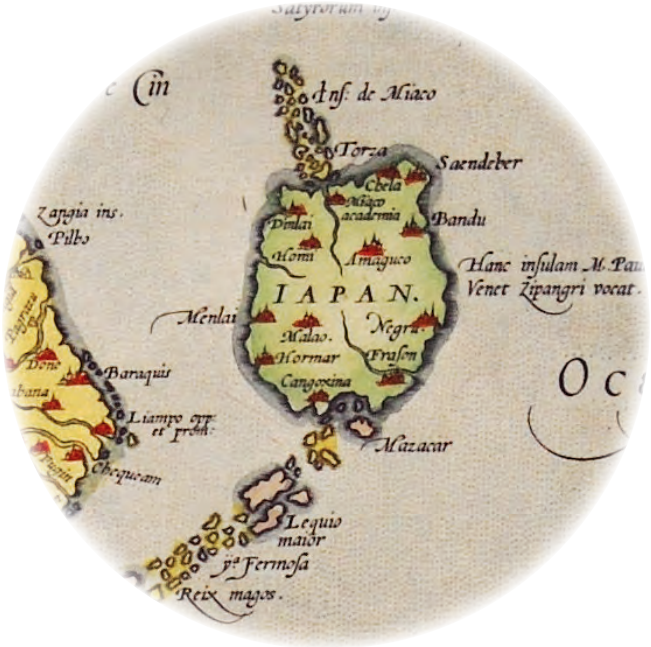
10. オルテリウス「アジア図」

1570年
大分市歴史資料館

アントワープ生まれの地図製作者オルテリウスが1570年に出版した世界地図帳『世界の舞台』に所収されたもの。中近東から極東の日本までアジア全域を描いている。日本は右上端に描かれ、その形は細長い大小の島と南に連なる島々で構成されている。細長い島の小さい方には「TONSA」(土佐＝四国)とある。一方、大きい島の南端に豊後、南の小島には鹿児島とあり、両者が九州にあるという認識がないことがわかる。なお、『世界の舞台』にあるオルテリウス「世界図」は天正遣欧使節が日本に帰国後、1590(天正18)年、豊臣秀吉に献上したものといわれる。

Map of Asia by ORTELIUS

Ortelius was born in Antwerp and a maker of map. He published a world's atlas *Theatrum Orbis Terrarum* in 1570.



11. オルテリウス「東インド諸島図」

1570年
大分市歴史資料館

アントワープ生まれの地図製作者オルテリウスが1570年に出版した世界地図帳『世界の舞台』に所収されたもの。インド・東南アジア・中国、そして日本を描いた地図。ルネサンス期から大航海時代までの地理上の新事実を反映、網羅した最初のものになる。日本はいびつな円形の島と南に連なる小さな島々からなっている。ザビエルの初上陸地として有名であった鹿児島が円形島の南端にあり、九州が独立島であるとの認識もない。

Map of The East Indies of ORTELIUS

A map of India, Southeast, Asia, China and Japan by Ortelius. Japan was drawn as a deformed round island with ranged small islands. Kagoshima was famous as the Francisco Xavier's first landing of Japan but Kyusyu wasn't recognized as an isolated island.

12. ティセラ「日本図」

1595年
津久見市

イエズス会士でポルトガルの地図製作者ティセラによる日本単体図。1595年に改定・刊行されたオルテリウスの世界地図帳『世界の舞台』に初めて掲載された。北海道はないものの、日本は本州・九州・四国で構成されており、かなり実態に近づいている。豊前・豊後・筑前・肥前などほぼすべての国名(59ヶ国)が表記され、九州には日出・府内・臼杵・佐賀関・鹿児島といった地名もみえる。 このティセラの地図は天正遣欧使節が持参した「行基図」(平安京など山城国を中心に近隣を楕円状にあらわし日本列島を形作り、平安京から五畿七道の街道が伸長する)をもとに製作されたものといわれる。また、教会のある場所をマーキングしていることもわかる。

Map of Japan by L .TEIXEIRA

A map of Japan was drawn by Tisera who was a Jesuit and a maker of map in Portugal. This map was run in Ortelius's world map ***Theatre of the World***, and it is very close to reality.

13. メルカトル「アジア図」

1595年
津久見市

メルカトル(1512～1594)の死後、翌年に息子のルモンドによって、完成されたもののひとつ。ほかにアフリカやアメリカ、イギリスなどのヨーロッパ諸国の地図が作られている。メルカトルは、赤道付近を等倍、北極・南極に向かうほど拡大率を高めた投影法で描いている。これらの地図は特に海図、航路用として利用された。日本は右上に描かれ、大きい島の南側には鹿児島(Cangoxuma)と記されている。

Map of Asia by G.MERCATOR

This map was finished by G. Lumond who was a son of G. Mercator, and it was used as the steamship route.

14. 鉄地筋金象嵌桃形兜(南蛮兜)

桃山時代／16世紀末～17世紀初
大分市歴史資料館

ヨーロッパの兜の影響を受けて日本で模してつくったもの。鉄地を左右に張り合わせ、鉢形を桃の形に作り、中央に一条の筋を立てるなど南蛮兜の特徴をよく示している。立て筋には金象嵌、前つばには唐草文の彫金をほどこしている。

Namban-style helmet

This Namban-style helmet has the shape of peach with the ivory stripe.

15. 象嵌南蛮人文鐙

安土桃山～江戸時代初期
津久見市

鳩胸中央と両脇に金の象嵌で南蛮人文様を加えた鉄製の鐙(あぶみ)。鐙は乗馬で用いる馬具のひとつで、これにより馬上で身体が安定することから武器の使用が容易になった。この鐙は中央にマントをつけた南蛮人、その両脇には従者らしき人物が描かれている。この鐙の踏込板は朱漆塗で、傷み具合などから実際に使用されていたものと考えられる。

Stirrup with Namban figure design in inlay

The stirrup made of iron was used actually at riding. It has designs of Westerner and figures look like his follower.

16. 南蛮人図鏡

桃山～江戸時代初期
大分市歴史資料館

南蛮人とはポルトガル人やスペイン人のことを指す。外国人に馴染みのなかった日本人は、南蛮人は財福をもたらす存在としてみていたようである。そのため、南蛮人をモデルとした多くの美術工芸品がつくられている。これは懐中用丸鏡で、その背面には帽子を片手に持つ南蛮人と桜の花を表している。

Mirror of Namban figure design

This is a flashlight round mirror. There is design of Westerners and cherry blossom on the back of this mirror. ("Westerners" means Portuguese and Spanish.)

17. 織部煙管

安土桃山～江戸時代初期
津久見市

1543(天文12)年のポルトガル船の来日以降、煙草は日本各地に広まった。日本では「煙草」、「多葉粉」などと表記することが多い。刻煙草を吸うために煙管(キセル)が作られ、当初は竹などが素材であった。この煙管は美濃国で製作された陶製の煙管で、織部焼の特徴的な緑釉がかけられている。

Long pipe(Oribe ware)

This ceramic pipe with green shine was made in the Gofu Prefecture. The cigarette became popular in Japan after 1543.

18. 南蛮船文鐔

江戸時代
津久見市

南蛮船をモチーフとした鐔（ツバ）で、西洋的意匠を取り入れた刀装具である。荒波の上に浮ぶ南蛮船は南蛮鐔の典型例である。舳先（ヘサキ）には南蛮人が配され、この所々に金象嵌（ゾウガン）が残っている。

Sword guard with Namban ship design

This European sword guard has the design of the Western-style ship in angry waves, and it was one of the popular style.

19. 南蛮船図鐔

江戸時代中期／17～18世紀
大分市歴史資料館

南蛮鐔（ツバ）と総称される江戸時代中期に流行したヨーロッパ文化の影響を受けて製作された異国風の意匠を有する鐔。表に山水と砧（キヌタ）をうつ人物が肉彫りされ、裏に金・銀の布目象嵌（ゾウガン）で帆と旗に十字をあしらった南蛮船が施されている。なお、鐔の表に作者とみられる「卜斎」の名前も彫られている。

Sword guard with Namban ship design

This Wentern-style sword gard has a signature of the producer "卜斎*Bokusai*" on the back.

20. 洋風文字龍文鍔

江戸時代
津久見市

異国風の意匠がほどこされた鍔（ツバ）。全体に龍を配し、下方部に洋風文字を刻んでいる。

Sword guard with Western-style letter and dragon design

This sword guard has the exotic design. The images of dragon and Western-style letters were carved.

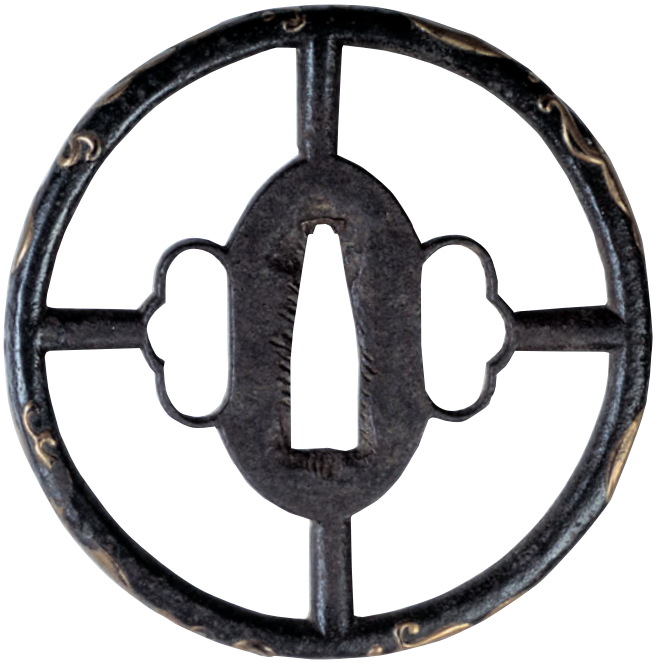
21. 洋風文字龍図鍔

江戸時代中期／17～18世紀
大分市歴史資料館

南蛮鍔（ツバ）と総称される江戸時代中期に流行したヨーロッパ文化の影響を受けて製作された異国風の意匠を有するもの。金や銀の布目象嵌（ゾウガン）を用い、龍とアルファベットとみられる洋風文字が表･裏共にあしらわれている。

Sword guard with Western-style letter and dragon design

The Western-style sword gard was made under the influence of European culture in the 18th century.



22. 十字透かし鐔

江戸時代
津久見市

非常に簡素化されたデザインの南蛮鐔（ツバ）で、外円に四本の線を延ばして十字が表現されている。

Sword guard with cross design

This is a very simple Western-style sword guard. The four lines of its frame signifies a cross.

23. 十字と葡萄図鐔（南蛮鐔）

江戸時代中期／17～18世紀
大分市歴史資料館

南蛮鐔と総称される江戸時代中期に流行したヨーロッパ文化の影響を受けて製作された異国風の意匠を有する鐔（ツバ）。耳中央に十字をかたどり、キリスト教に深い関わりをもつ葡萄（キリストの血、もしくはキリスト自身の象徴）の図柄が銀象嵌で表・裏にあしらわれている。

Sword guard with cross and grape design

The Western-style sword gard was made under the influence of European culture in the 18th century. There are designs of the cross and grapes.

Ⅲ 受容と信仰

フランシスコ・ザビエルの招聘、その後ガゴ神父一行が府内を訪れたことによって、大友領には多数のキリシタンが生まれた。領主自らが洗礼を受けたこともありキリスト教が保護され、積極的な布教活動がおこなわれていた。こうしたことを示す多くの遺物が今日では数多く発掘されている。中世大友府内町から発掘されたこれらの遺物にはキリシタンたちが身につけていたものなど多くのゆかりの品々がある。メダイやコンタツなど原城跡発掘遺物とも共通するこれらの資料から、当時の人々がキリシタンとして信仰していた様子を知ることができる。

24. 指輪

16～17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

全体的に細かな刻み目がほどこされているもので、二重に針金状のものを巻いている。金属は錫と鉛の合金で、二重の環に長方形の台を接着している。指輪は原城跡でも発掘されている（一連・二連の環）ように、キリシタンを象徴するものとして多くの成果が挙げられている。

Ring

A double ring decorate with delicate nick and winded up double wires. The metal is an alloy of silver and lead. It's excavated from Hara castle.

25. コンタ

16～17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

「ロザリオの祈り」の繰り返しの数を確認するためにつかう数珠（ロザリオ）の珠をコンタ（コンタツ）と呼ぶ。バラの花冠を意味するラテン語rosariumに由来する。このコンタはガラス製で、側面は刻み目をほどこして花弁状に仕上げられている。府内町で製作されたものと考えられる。

Contas（Rosary）

Rosaries were used for counting the number of times a prayer was said and it was called "Kontatsu". This word derives from Latin "rosarium" means "crown of roses".

メダイ出土状況

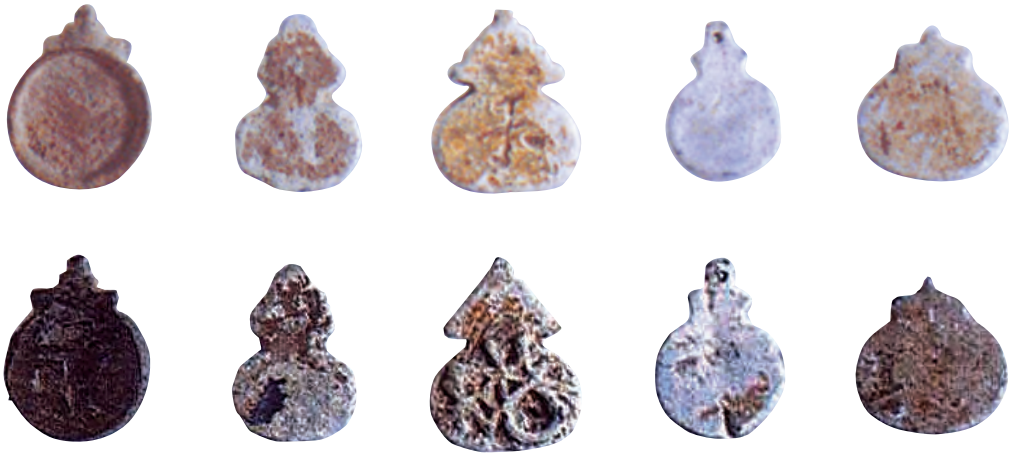
26. メダイ

16 ～ 17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

信仰の拠りどころとしてカトリック信者や聖職者が身につけたり、携帯したりするもの。キリストやマリア、聖人、十字架などの象徴的な銘文が表裏に刻まれる。このメダイには、聖母子像とヴェロニカが刻まれている。府内町で製作されたと思われるメダイで、鉛を主成分としている。

Medal

Lead medal of the Virgin Mary, Jesus Christ, and Veronica.　It was made at Funai town.



27. メダイ状金属製品

16 ～ 17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

3世紀頃には定着したとされるメダイが日本にももたらされると、宣教師らの指示により各地でつくられるようになる。これにあわせ同様の形をしたものもつくられ、このメダイもそのひとつに思われる。上端部には紐を通すための突出部があり、メダイと同じように携行されたと思われる。

Medal-shaped metal product

The missionaries had instrusted to Japanese Christian on how to make madals and medal-shaped metal product seems to be one of them.

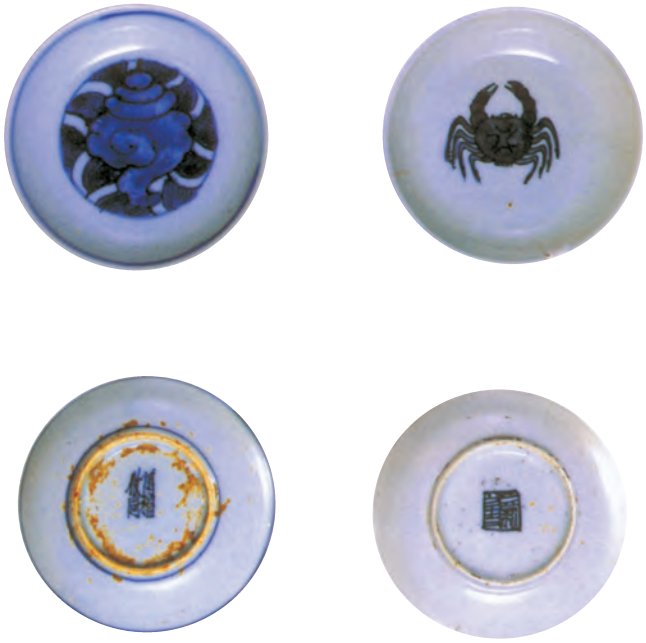
Ⅳ 大友府内の交流

中世大友府内町跡からは大友氏が海外交流していたことを示す多くの渡来物が発掘されている。中国をはじめ、タイやベトナムなどからも陶磁器が輸入されていた。これらは南蛮貿易を通じてもたらされたものになるが、中国製ばかりか、タイ、ベトナムの製品が数多く発掘されている。これらのものから大友氏の趣向や繁華していた大友領の様子を垣間みることができる。

中世大友府内町跡

大友宗麟が北部九州を統治していた頃の中心地である豊後府内には国際貿易として栄えていたことを示す資料が発掘されている。これにあわせて中世都市の様子を示す遺構もあらわれるなど、大友府内の姿が明らかになってきている。

大友府内町跡全景



28. 中国青花皿

16～17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

大友府内町跡から発掘されたもの。藍色の多くの文様を表現した青花は16世紀後期からひろく普及するようになる。この資料はいずれも、中国景徳鎮窯で生産されたものと思われる。左はホラ貝、右にはカニが描かれている。

Excavated remains at Otomo Funai town (Porcelain,China)

Indigo colored porcelain dishes were made at Jingde Town in China. The image of triton was drawn on the left side and crab on the right side.

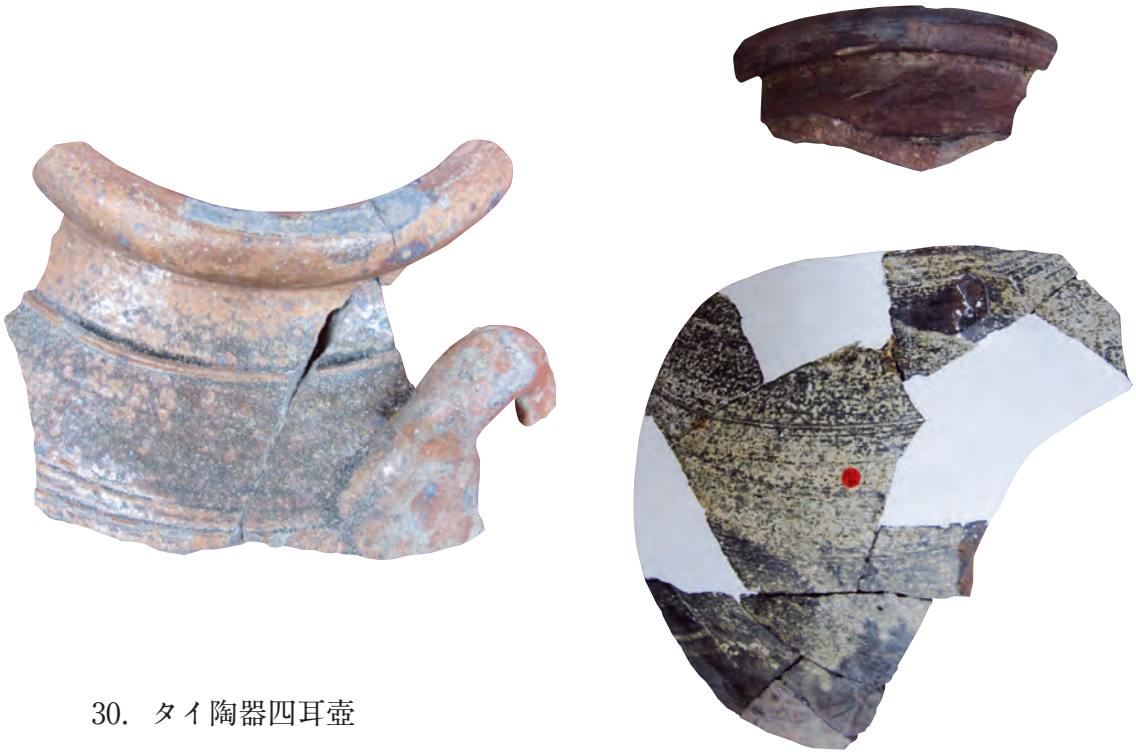
29. 中国翡翠釉菊花文小皿

16 ～ 17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

中国南部の窯で生産されたもので、翡翠色の釉薬がかけられ、外側には菊花文がほどこされている。

Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics ,China)

Jade-colored glazed ceramic with the chrysanthemum pattern. It was made at kiln of south China.



30. タイ陶器四耳壺

16 ～ 17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

ノイ川窯系の窯で生産された壷で、赤褐色の素地に、白泥状の釉薬がかけられている。この資料の肩の部分につけられたよっつの半環状の耳に由来することから「四耳壷」という。

Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics ,Thailand)

A Russet porcelain pot with white muddy glaze made at a kiln of Noi River. It has four half-ringed ears on the shoulders.

31. タイ練上手クンディー

16 ～ 17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

これは「練上手」という技法で製作されたものである。練上手とは、色の異なる粘土を練り混ぜて縞模様を表現する技法のことをいう。これは円盤状の口縁部に乳房形の注ぎ口をつけた「クンディー」(水注)として使用された。

Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics ,Thailand)

Ceramic picher made of "練上手*Neri-agede*" technique.
It was used for picher called "Kendi".

32. タイ鉄絵合子蓋

16 ～ 17世紀
大分県教育庁埋蔵文化財センター

これは「宋胡録(スンコロク)」(タイのスコータイ県で焼かれた)と呼ばれる陶器である。南蛮貿易によって日本に多数持ち込まれた陶器のひとつで、日本では茶器として利用された。渦巻き模様と幾何学文を組み合わせた文様を、鉄絵で表現している。

Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics ,Thailand)

This pottery called "宋 胡 録*Sunkoroku*". It was used as a tea set in Japan. Combination of spiral and geometry pattern were drawn of iron.

キリスト教会と墓地

近年、大友府内の教会跡の発掘もすすめられ、文献調査ではわからなかったことが明らかになってきている。大友府内の発掘がすすめられているなかで、教会に附属するキリシタン墓も出土している。人骨も含めて出土されたことから、埋葬された当時の状況を色濃く伝えている。

キリスト教会に附属する墓地

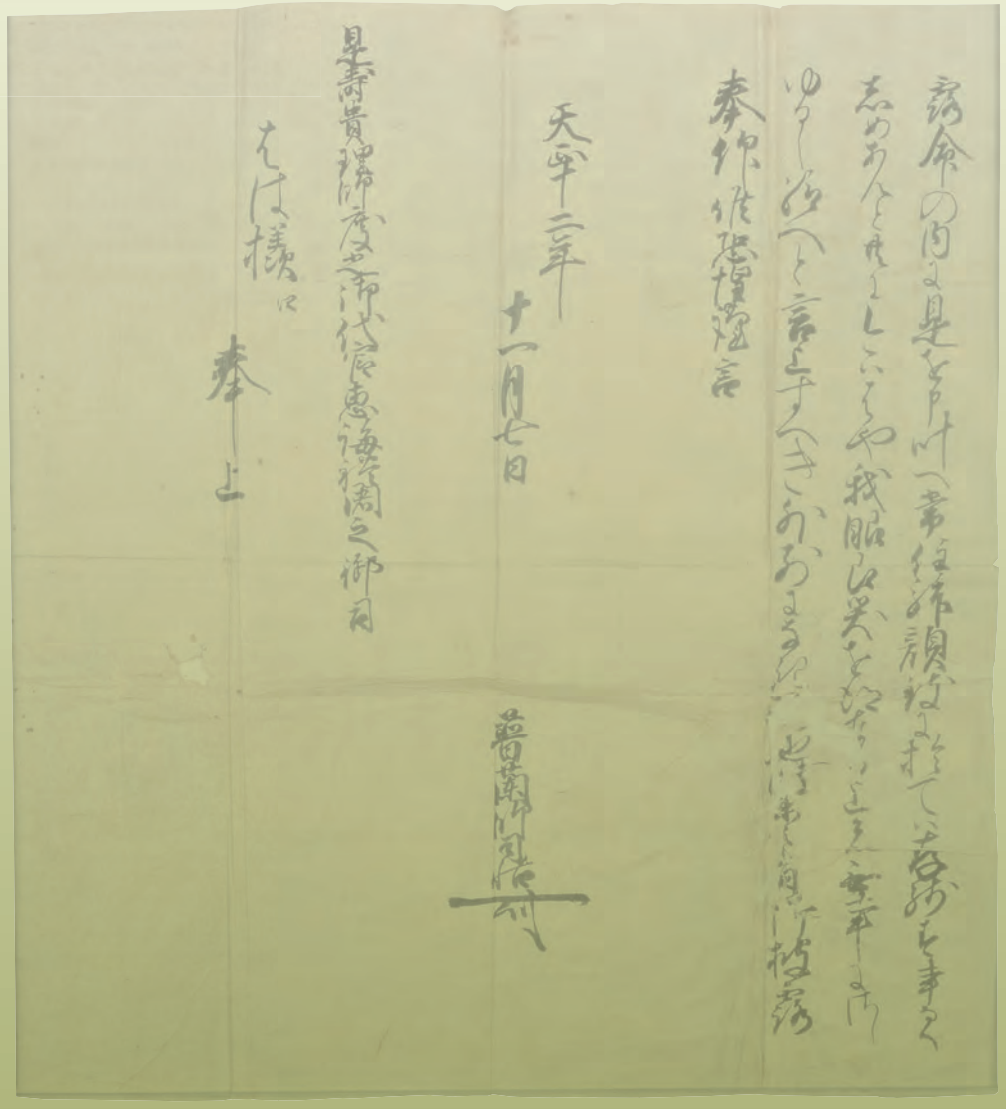
キリシタン墓全景

■豊後国とキリスト教関係年表

年次		事項
1551年	天文20年	・ザビエル、山口より府内（大分）に来る ・10月24日、インドに出帆する
1552年	同21年	・8月20日宣伝師バルテザル・ガゴ府内で布教する
1553年	同22年	・府内に耶蘇会の学校が開かれる
1554年	同23年	・朽網宗策、12月7日聖堂を直入町字下河原に建てる
1555年	弘治元年	・ルイス・アルメイダ府内に育児院を建てる
1556年	同2年	・山口より多くの宣教師が府内に到着する ・ルイアル・メンダ私財5000金を寄附する
1557年	同3年	・宣教師アルメイダ府内に病院を建てる ・外科やライ患者2部門に分ける
1559年	永禄2年	・7月1日、大分に大病院が建設される ・16ヶ所の部屋及び手術室を設ける
1561年	永禄4年	・府内に学校が創立され、ラテン語が教えられた
1563年	同6年	・学校で生徒15名に声楽、バイオリンが教授される ・12日、臼杵に大友宗麟が移住する
1569年	同12年	・井田、三重に耶蘇会の教理学校設立される
1578年	天正6年	・宗麟、カブラルにより、受洗しフランシスコと名乗る ・夫人はジュリヤと称する
1580年	同8年	・バリニャーノ臼杵に訪れる ・この年府内にコレジオ、臼杵にノビシャドが建られる
1582年	同10年	・大友宗麟、有馬晴信、大村継忠等、伊東マンショ等4名の少年使節団をローマに派遣する ・宗麟、直入郡木原神社その他多く社寺を焼打ちする
1584年	同12年	・志賀親次、臼杵に至りパードレー・ペロ・ゴメズより受洗しドン・パウロと称す ・この時パードレ・レイマン竹田に来る
1587年	同15年	・3月大友義統受洗、コンスタチノという ・7月25日、秀吉宣教師追放令を発布する ・志賀親次は命を奉せず宣教師を残留させる
1589年	同17年	・大友義統は宣教師を追放する ・高田出身の仲摩ヨラムと妻、子2名、召使1名が処刑される
1604年	慶長9年	・岡藩主中川秀成は朝地町志賀に聖堂建設を許可する
1606年	同11年	・サン・ヨゼフ佐伯に修道院を建てる ・毛利高政、佐伯に教会をつくる
1610年	同15年	・細川忠利中津の伝道所の費用を出しキリシタンを保護する
1612年	同17年	・中川神社の銅鐘鋳造させる（サンチャゴ病院の鐘） ・家康キリシタン禁令を出す。高田、野津の宣教師が追放される ・臼杵、志賀は滞在が許される
1613年	同18年	・津久見に教会が建られる
1614年	同19年	・豊後の宣教師長崎へ追放される ・7月13日木原村のミカエル・チュービヨーエ（忠兵衛）とリノの2人兄弟は火あぶり、ミカエルの妻、マキジゼンシヤは、夫の火刑を見ても改宗せず斬首のうえ火刑になる
1617年	元和3年	・中川家の家老古田重治、フランシスコ・ボルドリノ、ペトロ・バウロ・ナバロを保護する ・殿町の切支丹洞窟礼拝堂はこの前後にできる
1618年	同4年	・中津のキリシタン宮永祐信外十余名斬首さる
1619年	同5年	・10月8日、切支丹改めのため村部に侍2名を巡回させる ・女性ルイザ没す
1620年	同6年	・ボルドリノ、肥後を経て天草に去る
1624年	寛永元年	・7月26日、三左の柴山勘三左衛門より、葛城村の附近一帯のキリシタンが火あぶりで処刑さるとの報告がある
1628年	同5年	・2月17日、岡藩の切支丹28名長崎の籠舎に到着する ・6月2日、一万田組市兵衛、直北組三郎兵衛、田中組吉左衛門、田代組の理左衛門、木原組九郎右左門、太田組三右衛門、倉木組久右衛門以上7人が召し捕られて入牢となる
1633年	同10年	・4月22日、朝地町石ヶ原城庵火あぶりとなる
1634年	同11年	・佐伯領のキリシタン11名火刑になる
1636年	同13年	・葛城村キリシタン5名死刑となる
1637年	同14年	・葛城村キリシタン14名死刑となる ・島原・天草の乱が起り岡藩士も出陣する
1638年	同15年	・2月、朝地町一万田の喜庵、司馬、板井迫の孫左衛門、桂八、大野町田代の幸三郎、清川村の五右衛門召捕られて転宗する ・島原・天草の乱が平定される。出陣者悉く帰藩する
1648年	慶安元年	・山川の伊三郎、その妻はつ、娘かん、手代の代五郎及伊三郎の弟吉蔵召捕られ長崎に送られる ・伊三郎は逃れて雲仙地獄に投ぜられる
1654年	承応3年	・正月29日、切支丹制礼を建て、在々へ目付を巡回させる ・8月4日、大野町酒井寺村長太郎、次郎八郎キリシタンとして捕えられる
1657年	明暦3年	・5月24日、竹田の横平村松右衛門、辻原村の久右衛門召し捕られ鏡にて火あぶりとなる
1658年	万治元年	・大分郡大南町（清田）キリシタン3名死刑
1659年	同2年	・渡辺玄礼の書によれば、豊後にてキリシタンが数名捕れ、肥後を経て長崎に送られるとある ・豊後崩れはじまる（～1683年）
1660年	同3年	・中川久清公、3月キリシタン3名を召捕り、鉄砲頭池田孫三郎、中川勘兵衛を使いとして長崎へ護送する ・踏絵を長崎奉行妻木彦右衛門頼熊から拝借する ・下平田の総兵衛キリシタン検挙で出奔、雲仙に投ぜられる ・8月岡藩で領内宗門改めのため、長崎奉行所から踏絵を借用、踏絵始まる。 ・8月踏絵の結果入田村の作右衛門、床七、善兵衛門の三家族27名を召捕り鏡にて火刑に処せられる ・鶴崎市高田の切支丹当領へお預けにつき三佐へ鉄砲頭1名、足軽20名出張、池田孫三郎護送する
1661年	寛文元年	・7月27日、宗門改帳書付始まる ・大野町矢田字竹中村重兵衛を召捕り、松野三郎衛門長崎へ送る ・直入野社家の農金右衛門召捕られ鏡にて火あぶり
1662年	同2年	・田代組郡山久左衛門女房召捕へられ、久左衛門の子庄左衛門10月捕へられ長崎に送る ・坂の市町（臼杵領）の切キリシタン30名が長崎へ送られる
1663年	同3年	・渡辺玄礼書によれば豊後よりキリシタン数十名長崎へ送る
1664年	同4年	・恵良原の伝之丞、宮園村勘左衛門、次郎兵衛を召捕り長崎に送る ・8月宗門改めにつき、侍中、町中、寺社、郷中残らず踏絵を行なう
1665年	同5年	・正月4日、幕府より切支丹宗旨奉行至急任命の指令あり正月14日宗旨奉行をはじめて任命する ・1月24日、岡藩で切支丹奉行を2人新設。
1666年	同6年	・田町の喜助切支丹のため召捕れ牢屋にて自害す ・切支丹牢屋改築の命あり
1667年	同7年	・原尻大庄屋古庄左兵衛切支丹に召捕られ長崎に送られる
1668年	同8年	・領内の切支丹、10月より12月まで70余名、臼杵藩80余名、天領200名召捕らる宇目の善右衛門一族、弥太兵衛、兄左衛門同人弟、重兵衛、加之介等切支丹にて追放される
1669年	同9年	・1月20日、臼杵領切支丹53名を召捕る ・領内のキリシタンが長崎へ回送される
1671年	寛文11年	【踏絵改鋳、異仏事件】 ・7月、拓殖新右衛門長崎より踏絵を借りて鋳造する ・長崎奉行河野権右衛門より詰問状が来る ・8月、中川藤兵衛、切支丹仏数10体を長崎に持参して鋳崩す ・10月14日、中川平右衛門以下14名閉門 ・御茶頭宗竹切支丹にて一族欠落する ・河内谷の仲間専助下女こまん召捕り獄門 ・8月、宇多枝の助左衛門長崎よりの命にて召捕りの所3年前日田に出奔する ・12月、中川平右衛門以下閉門を解かれる
1672年	同12年	・正月28日、借用の踏絵2人の役人在々を廻りてふませる ・12月キリシタン拷問の方法につき幕府の指令来る ・山川の尾崎にキリシタン牢死者を多数埋葬する
1678年	同6年	・5月28日、田井村武次郎キリシタンとして召捕られ長崎へ護送される
1679年	同7年	・菅如閑一族切支丹にて召捕られ斬首される
1681年	天和元年	・8月27日、村々98ヶ所に切支丹制礼が建てられる ・その役人服部五衛門、高山太左衛門、朽網郷の仲村、太右衛門、与吉は切支丹牢屋から逃げるも、捕らえられて磔刑となる
1683年	同3年	・拓殖新右衛門、宗門帳を江戸へ持参指出する
1685年	貞享2年	・3月5日、菅作之進、太田の切支丹楠衛門助次郎二家族13名を召捕る ・右二名だけ長崎に送り家族は転宗 ・朝倉村庄左衛門キリシタンだったが転宗
1701年	同14年	・6月27日、江戸詰定府の人々宗門改書を公儀に提出する ・冬原村市兵衛キリシタンとして長崎へ送られる
1713年	正徳3年	・塩山忠助の仲間、勝太郎キリシタンとして召捕らえられ、鏡にて磔刑となる
1737年	元文2年	・4月阿鹿野組十字郎切支丹にて検挙中島原へ出奔す ・片島組の元キリシタン死亡につき火刑
1738年	同3年	・2月古町垂水屋平兵衛宅にて踏絵の節、床板折れ地下穴蔵に転落した時地下室にキリシタン物が発見される ・峰越村金之丞、キリシタンとして水責拷問にて水死す
1745年	延享2年	・9月直北組類族藤右衛門挟拷問、12月踏絵改につき覚書をだす
1843年	天保14年	・佐伯藩領内のキリシタン類族が断絶
1860年	万延1年	・臼杵藩で踏絵を止める

［参考文献］
・木村礎 編『藩史大事典』第7巻 九州編（雄山閣, 1988年）
・北村清士『大分県の切支丹史料』（自費出版, 1960年）

論考



寄　稿

府内の教会とキリシタンの文化

東京大学名誉教授　五野井　隆史

はじめに

豊後府内にキリスト教がフランシスコ・ザビエルによって伝えられたのは、1551年（天文20）である。その二年後に大友屋形の後ろに位置する一角に教会が造られ、1587年（天正15）頃まで存続した。その間、キリスト教に関わるヨーロッパの文化が移植され開花した。ここでは、教会典礼に欠かせない音楽、イエス・キリストの教えである隣人愛の実践としての医療活動とそれを推進したミゼリコルディア（Misericordia）（慈悲）の組、そして修道者や司祭養成のための教育機関コレジオ（Colégio）（神学院）について略述したい。

1. 教会音楽

記録の上で、ヨーロッパの音楽が豊後で初めて奏でられたのは1551年9月20日頃のことである。ザビエルが山口から日出（ひじ）港に到着した時、ポルトガル人たちが船上でシャラメラとフラウタ（フルート）を奏して彼を出迎えた。

教会が造られた1553年以降、教会では主日や祝日、特に降誕祭や復活祭のミサで、また四旬節の様々な儀式の際に聖歌が歌われた。単旋律のグレゴリオ（canto chão , canto llano）聖歌であった。バルタザール・ガーゴ神父の1555年（弘治元）の書翰によると、同年の復活祭を迎える前の聖木曜日（4月11日）の夜に府内教会の修院（カーザ）に150人ほどのキリシタンが集まり、ガーゴ神父からキリスト教受難の話を聴いた後に、ミゼレレ（Miserere）・メイ（Mei）・デウス（Deus）（神よわれを哀み給え）〈詩編51〉が歌われる中で、ジシピリナ（鞭打ちの業）が行われた。復活祭の4月14日にはミサの中でグレゴリオ聖歌が斉唱されたであろう。

1556年に日本視察のために府内を訪れたインド管区副管区長メルシオール・ヌーネス・バレトが音楽教育を受けたポルトガル人若者5人を伴って来たが、彼らは「主要な主日に私達の聖務を荘厳に執り行うために」グレゴリオ聖歌と多声部（canto d'orgão）聖歌を教え込まれていたため、教会の諸祭儀において歌われる聖歌の歌い手としてキリシタン達への歌の指導を期待されていた。この年、初めて二声以上の多声部聖歌が歌われたが、単声とは異なり多声による聖歌は荘重さが加わり、キリシタン達の心を大いに動かすことになった。多声部聖歌は体面を重んじ華やかさを好む日本人向きと見られていたからである。

同年、府内教会に聖歌隊が発足した。来日したポルトガル人若者5人のうち二人がイエズス会への入会を許され、ギリェルメ・ペレイラが教会音楽の指導と普及に当たり聖歌隊を指揮した。翌1557年の復活祭（4月18日）には二つの聖歌隊（合唱隊）が活動していた。恐らく少年と少女の別々の聖歌隊があったのであろう。聖週の哀悼の水曜日（14日）にはこれらの聖歌隊に同地に越冬していたポルトガル人数名と前述の若者5人が参加した。多声部聖歌によるベネディクス（Benedictus）（讃むべきかな）一回を唱えて詩編を終えてから、ミゼレレ・メイ・デウスが唱えられた。聖金曜日には荘厳な受難の歌が唱えられ、聖土曜日には教会の中央にある小聖壇に聖歌隊の一部が配置され、聖歌隊がキリエ（主よ）を歌ったのち、司祭がグロリアを唱え聖歌隊がこれに応誦した。

1561年(永禄4)の復活祭(4月6日)には少年達の聖歌隊によって三つの歌が歌われた。(1)ディク(Dic)・ノビス(Nobis)・マリア(Maria)(マリア、我らに告げよ)、(2)マリア・マグダレナの答誦、(3)アレルヤ(Aleluya)・ラウダテ(Laudate)・ドミヌス(Dominus)・オムネス(omnes)・ジェンテス(gentes)(すべての民よ、主をほめ讃えよ)。この指導は同年イエズス会に入ったイルマン(修道士)のアイレス・サンシェスが行なった。聖歌隊は府内の教会を拠点にして豊後各地の教会を巡回した。府内近郷の高田、大在、井田、敷戸、さらに遠く朽網にまで及んだ。

イルマン・サンシェスは聖歌隊だけでなく、楽器の指導も行なった。弓で弦を擦る、いわゆる擦弦楽器のヴィオラ・ダルコ(violos darco)を修院に居た日本人と中国人の少年15人に教授していた。彼は1563年8月にはヴィオラ・ダルコを携えた少年達を引き連れて肥前の横瀬浦に赴き、上長コスメ・デ・トルレスの最終誓願式に出席した。ルイス・フロイス神父司式によるミサでは聖歌隊は聖歌を合唱したが、ヴィオラ・ダルコが歌の伴奏に使用されたようである。

1565年の降誕祭には、府内教会ではヴィオラ・ダルコと多くのモテットをもってミサが上げられた。モテットはルネサンス期に流行した多声音楽であったから、ヴィオラ・ダルコを伴奏にして多声部聖歌隊やモテットが歌われたことになる。

1564年に府内教会にいたイタリア人神父ジョアン・バウティスタ・モンテは少年達のうち数名はすでにかなりの歌い手でありヴィオラ・ダルコの弾き手であると見ていた。府内教会で養成された少年達は伝道士となって各地の教会に派遣されて聖歌隊を編成し、またその伴奏者として活躍した。府内はヨーロッパ教会音楽発祥の地であり、また各地の教会への発信地・人材の供給地でもあった。

なお、ヌーネス・バレトは1556年に聖歌集二点を府内にもたらした。ローマ教会通常典礼聖歌集一冊、多声部聖歌集一冊である。他にフランシスコ・ティテルマーノの「ソロモン頌歌の頌歌に対する注釈[書]」がある。彼は同年秋に府内を去ったが、これらの聖歌集は同地に残されたと思われることから、のちにはそれらの写本が作られて各地の教会に配布されたようである。

2. 病院開設と慈悲の組

トルレス神父が病院開設を構想して大友義鎮にその計画について開陳したのは1557年1月のことである。新教会と修院が前年11月に完成した結果、旧教会と旧修院が空屋となり、これらを病院に改造して活用しようということであった。それには、1556年にイエズス会に入った元商人のルイス・デ・アルメイダの存在があった。彼はポルトガル国王ジョアン三世下付の外科医の免許を有し、また彼の助言と資金提供によって1555年に府内に育児院が設立されて幼児の救済に実績を残していたこと、また同地に皮膚病、疵傷、ハンセン病を患う者が多く、医療を必要とする人々が多かったことである。

旧教会の病院への改造工事は1557年1月末か2月初めに始まり、復活祭(4月18日)以前には完了していた。病院は「二つに仕切られた部屋から」なり、一つは腫瘍及びハンセン病患者のための病室、他は「諸々の病気のため」の病室、すなわち外科病室であった。病院の完成後にもう一つの工事が行なわれ、旧修院が貧者のための家に改造された。これは「貧者を収容するための病院」とも言われた。

イルマン・アルメイダが外科を担当し、いわゆる、南蛮医学が始まったことになる。彼は後継者養成を積極的に行ない、修院の者たちを彼の補助者に育てた。同僚のイルマン・ドゥアルテ・ダ・シルヴァ、のちにはアイレス・サンシェスがアルメイダ不在の病院を支え、日本人の医者ディオゴを育てた。内科が付設され、トルレスと共に山口から府内に避難して来た多武峰の元仏僧キョウゼン・パウロがこれを担当した。彼は漢方医であった。彼が病死した後にはザビエルの元宿主で山口から避難して来た内田トメが内科を担当した。キョウゼン・パウロが数種類の漢方薬の処方と漢方に関する書物を遺したため、トルレスは二人の日本人キリシタンに命じてそれらについて学習させ、薬の調合に成功した。

アルメイダの施療は一日に二度、午前と午後に各一回行なわれたようである。彼の外科治療の技術

については明確ではないが、当時の日本の水準よりははるかに優れていたと考えられている。十年、二十年来の傷や腫物が治療され、早期に快癒したことが報告されている。そうした評判は畿内地方にまで達した。ガーゴ神父の1559年の書翰によると、病院の評判は日本の諸王の頭(天皇)がいる都や堺、綜合学問所のある坂東(足利学校)、仏僧達の領袖(座主)がいる比叡山(延暦寺)にまで伝わっていて、同年夏以降11月までに200人以上の者が外科と内科の治療を受けたという。些かの誇張があるとは言え、府内病院に関する噂が日本の諸地方に広まっていたことは確かなことのようである。

病院の評判の高まりに伴って患者が増え、病院の拡充・増設がなされた。礎石を据えた大きな木造病院が1559年9月1日に落成した。新病院は中央部に祭壇を設け、廊下を挟んで両側に八室からなる病室があり、16名を収容できた。病人が病室から出て来て治療が受けられるように縁側が設けられた。また医者のために診療室と思われる一室が確保された。病院で働く職員達のための家が病院の近くに数件建てられた。長屋風の建物であったように思われる。新設病院は、従来からの病院で施療されていたハンセン病や腫瘍、及び外科以外の諸々の病気、すなわち内科治療を行なうために造られた。

宣教事業の進展に伴い、その中核を担っていたアルメイダが諸地方に派遣されて巡回することが多くなったために、また一方で医療業務の増加と病院の新設等によってアルメイダの存在はますます不可欠となっていたけれども、彼に代る受け皿が必要となり、病院の管理運営に関する新たなシステムが模索された。

トルレスはミゼリコルディア、すなわち慈悲の組を設立することによって医療事務の一切をこれに委託することにした。慈悲の組の会員(組員) 12名が選ばれ、毎年2名が中心的役割を担って病院の管理運営に当たることとなった。1559年7月に設立された慈悲の組は(1)病院における医療活動とその運営、(2)貧者に対する救貧活動を目的とした。慈悲の組がめざすところは、教理書『どちりいな・きりしたん』において説かれている隣人愛の実践にあり、「慈悲の所作」14か条を行なうことであった。「色身の所作」7か条では病者を労り見舞うこと、飢え渇したる者に飲食物を与えることが強く求められた。

府内に設立された慈悲の組は、当時ゴアで行なわれていたミゼリコルディアの組織と規則が参考にされたものであった。慈悲の組の会員12名はいずれも既婚者であり、病院の周辺に造築された、いわば職員住宅に住んでいた。彼らは信仰のために山口や平戸から府内に逃れて来ていた者と、府内出身の者たちから構成されていた。救貧活動のために募金を募ってこれを山間部に住む貧者達に配り、病人を見舞い、死者が出ればその葬儀と埋葬に参加した。

1557年に「貧者達のための家」と称していた建物は、1559年には「慈悲の家(慈悲院)」と言われ、諸国行脚をしていた勧進比丘尼がキリシタンに改宗して平戸から同地に至って、豊後出身の未亡人二人と共に居住して奉仕活動に従事していた。

上長トルレスが肥前地方に移った1562年以降1570年代前半までの十数年間、府内では宣教師が不在がちであり、またイエズス会の者が医療業務に関与することがなくなったこともあって、府内の病院に関する報告は激減し、1566年に外科と内科からなる病院の活動についての報告があるにすぎない。1570年にアルメイダは二ヶ月ほど府内に滞在したが、病院に言及した記事はなく、その時に執り行なわれたキリシタンの葬儀について言及して、慈悲の組の会員4人が遺体の納められた棺を乗せた輿を運んだことについて報じているだけである。

九州の諸領主はイエズス会が一時関与した医療に強い関心を示し、金瘡等の治療のために同会に医師の派遣を要請したため、トルレスは府内で外科を習得した日本人医師を方々に派遣した。イエズス会の指導によって設立された慈悲の組は府内では医療事業への参与という形で実現したが、他地方の教会では1560年代にキリシタンたちの信仰を深め強化する共同体として慈悲の組が設立され、順調に進展していったことが知られる。しかし、医療事業に関わった慈悲の組は、1583年に長崎に設立されるまでどこにも存在しなかった。

3. 府内のコレジオ（神学院）

1579年に来日した東インド管区巡察師アレッシャンドロ・ヴァリニャーノは、将来における宣教事業の継続・進展のためには日本人修道者の存在が不可欠であると判断し、その養成に着手した。翌年肥前有馬と安土城下にセミナリオ（神学校）を設立し、同年12月豊後臼杵にノビシアド（修練院）、続いて1581年3月に最高学府のコレジオを府内に創設した。コレジオが府内に設けられたのは、修練院が近接した臼杵にあったこと、府内が下地方（肥前）と都との中間地点に位置していて、将来、日本のイエズス会上長が同地に常在するようになると見なされていたからである。

コレジオは教会と病院がある敷地の一角に建てられた。イエズス会が所有していた地所が狭隘であったため、コレジオは五室からなる一棟の建物だけであった。しかも院長フィゲイレド神父が1583年の書翰で指摘するように、その建物は新築して2年しか建っていなかったにもかかわらずすでに腐蝕が始まっていたのであり、大友宗麟（義鎮）も改築を考慮していた。

コレジオでの教育は人文課程（自由学芸）2年で、これを修了したのち哲学・神学課程に進むものであった。1583年ペドロ・ゴメス神父の赴任に伴い哲学の講義が始まった。テキストは1572年にローマで出版されたフランシスコ・デ・トレドの『論理学解説』を日本の実情に合わせて調整したものである。2年間の課程が終った1585年4月に神学課程が始まり、ゴメスとアントニオ・プレネスティーノ神父が担当した。

コレジオ開設当初の学生5人は全員ポルトガル人で、通詞伴天連と称されたジョアン・ロドリゲスはその一人であった。6年間存続したコレジオには16名が在籍し、日本人2名が人文課程に進んだ。日本の古典と仏法も講義され、若狭出身で堺の元漢方医養方軒パウロがこれらを担当した。

修道者及び司祭養成のために設けられた府内のコレジオは、ヨーロッパと日本の古典・東西の思想と宗教が学問的に接触した最初の場であり、両文化交流の種子が蒔かれた。

おわりに

1586年末、島津勢の大友領内への侵攻によって府内と臼杵の教育機関は山口に避難し、さらに翌年発令の伴天連追放令によって宣教師は領外に追放され、教会を中心にした文化活動は停止した。このため、三十数年間にわたって培われてきた府内のキリシタン文化は悉く枯死してしまった観があり、この間に蒔かれた東西文化交流の種子は十分に結実しないままに新興のキリシタンの地、長崎に受け継がれていくことになる。長崎に先立つ府内の教会において見られたキリシタン文化に関する諸活動について、あらためて光を当てる必要があるように思われる。

〈参考文献〉

東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料　イエズス会日本書翰集』訳文編之一・二
松田毅一監訳『一六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋社、1997年）第三期第一・二巻
五野井隆史「豊後府内の教会領域について－絵図、文献史料と考古学資料に基づく府内教会の諸施設とその変遷－」
（『東京大学史料編纂所研究紀要第14号，2004年』）
五野井隆史「豊後におけるキリシタン文化」（大分県歴史博物館『研究紀要』第7号、平成18年）

豊後国における絵踏み
−臼杵藩と岡藩を中心に−

西南学院大学博物館　学芸員　安高　啓明

はじめに

本稿は豊後国で実施された絵踏みの実態について取り上げるものである。絵踏みはキリシタンではないことを証明する手段として、各地で行なわれていたことは周知の通りである。当初、宗門改めの象徴ともいうべきものであった踏絵は、いつしか形式化し年中行事化していったところもある。しかし、幕末期に結ばれる修好通商条約まで頑なに絵踏みを実施していたのを法制的にみると、幕府の国是ともいうべき禁教を固持することが、江戸幕府の存在意義でもあったためである。

絵踏みは、いつ頃、どのように、だれを対象に行なわれていたのかは地域によって様々なようである。先般、五島における宗教政策をみてくなかで、絵踏みの実態を若干取り上げたが（拙稿「五島のキリシタンと禁教政策」、西南学院大学大学院国際文化研究科（代表高倉洋彰）『キリスト教文化の東方伝播とその展開』西南学院大学教育・研究推進機構、2010年）、絵踏みがおこなわれたことはわかっていても、その実施形態の詳細なところまで取り上げたものは少ないように感じられる。こうした事情に鑑みて、豊後国のなかから特に臼杵藩と岡藩の絵踏みの実態を中心に先行研究を踏まえながら紹介していきたい。

1.豊後国の絵踏み

寛文年中頃から九州各地で絵踏みをおこなうときは、長崎奉行所から踏絵を借りることを原則とした。それは、1669（寛文9）年に長崎の鋳物師である萩原祐佐が真鍮踏絵を作ったことが大きな理由といえる。寛永鎖国令により長崎奉行のキリシタン取り締まりが職務として明文規定されるが、長崎奉行所において宗門改めのときに利用する踏絵を管理・保管することは、長崎奉行の権限を一層強めていくことになる。また豊後国では、万治・寛文期にキリシタン露顕があってから、あまねく領民に絵踏みをおこなっていくことになる。

豊後国で長崎奉行から踏絵を借りていたのは、日出藩、岡藩、臼杵藩、府内藩、杵築藩である（片岡弥吉『踏絵』77頁）。本節では府内藩について少しふれておくと、府内藩ではキリシタン宗門改めは春・秋の二季にわたりおこなわれていたことがすでに指摘されている（『大分市史』上巻、859頁）。春季は正月26日からおおむね始まり、家中、寺社方、町人、百姓等、領内全住民に絵踏みをさせた。秋季は7月17日からはじめられ町人、百姓のみを対象とした。ともに約１ヶ月間で終わり、町中から改めて、その後、郷村部でおこなわれた。町中で要した日数は８日間程で、藩からは改役人として、奉行と目付が、中間に所用品を持たせて出張巡回していた（絵箱持は中間の２人）。

府内藩柞原神社（大分市）の「座居等之覚」（『続豊後切支丹史料』383頁）をみると、府内での絵踏みの様子が詳らかに図式化されている。絵踏みには奉行、目付のほか、大宮司、絵踏役、絵箱役、御手代、大庄屋、庄屋などの村役人が詰めている。百姓や社人は絵踏役の監督のもとで絵踏みをして、大庄屋の前で帳面に判形して外に出ることが許され、絵踏みが終了したのであった。

2.踏絵の貸借

ア)臼杵藩

臼杵藩では1634(寛永11)年から転びキリシタンを対象として絵踏みがはじめられている(『大分県史』近世編４、76頁)。寛文期になって絵踏みは転びキリシタン以外にも実施されるようになっていく。臼杵藩の場合、正月の長崎使者を以って借用していた。おおむね前年の12月23日に使者が選定され、正月2日に長崎へ向けて出発することが通例だったようである。この長崎奉行所から踏絵を借用していたことを下記のものにより確認できる(『続豊後切支丹史料』346頁)。

一筆致啓上候　御役所無御別條弥御堅固ニ可被成、御勤珍重奉存候、然者往来無滞去十一日長崎表茶屋吉左衛門方へ到着、良日巳ノ刻御使者相勤毎之通絵板弐枚借用仕証文差出シ置候、翌十二日彼表出立仕私始惣同勢今十九日玉来迄相詰申候、明夜小坂止宿明後廿一日五ツ時前後帰着候間、毎之通附人一人平清水迄御差出置可被成候、無程帰着之上万々可得御意候　恐惶謹言

正月十九日　　矢野八郎右衛門

石井與七郎様

これによると、１月11日に長崎に到着し、長崎奉行所で「絵板」を「弐枚」借りている。また、借用するにあたり、巳刻(９～11時)に奉行所を訪れ、証文(借用証)を奉行所に提出していることがわかる。借用した翌日に長崎を出発し、21日に臼杵に到着している。長崎から臼杵に戻るルートは、玉来(現竹田市)から小坂(現豊後大野市三重町)に入り、平清水(現臼杵市福良)を経由して臼杵に入っている。日数も12日に長崎をたって21日に到着していることから、9日間の行程だった。

なお、今回長崎へ踏絵の借用に行った矢野八郎右衛門は、到着に先立ち平清水に附人を送るようにと指示している。踏絵の到着にあたり、別の役人をたてたことになるが、それだけ踏絵に特別な取り扱いをしていたことがわかる。上記の史料をみると、踏絵を２枚借用していたこと。また平清水まで附人を送るというのは、「毎之通」と記している。こうした踏絵借用のルールは、慣例化したことだったのである。

踏絵を長崎に返却するのは、2月下旬(20日以降)となっていた。2月23日に臼杵を出発することが多く、先に挙げた行程を考えると3月1日、もしくは2日に奉行所へ返納していたことが慣例だったものと考えられる。こうして踏絵の返却を申し付けられた使者は、「人足三人馬二疋」が与えられ、長崎へ出立することになる。もし、返却が遅れる場合は、事前に長崎奉行所へ断っておく必要があった(『豊後キリスト教史』18頁)。

去十三日貴札致拝見候、然者先頃進之候踏絵弐枚御請取被成候旨、御同性右京亮殿御領内改相済次第被致返進候様、御留守居衆江被仰付置候由、得其意誠被入御念御事奉存候、恐惶謹言

二月廿一日　　宮城主殿

山岡十兵衛

稲葉能登守様

御報

これによれば、2月13日に臼杵藩主稲葉能登守から長崎奉行所に連絡がいっており、その内容は踏絵を2枚借用していたが返却が遅延することだったと思われる。これにつき、宮城主殿と山岡十兵衛の長崎奉行は、右京亮の領内で改めが終わり次第、踏絵を返却するようにと指示している。上の資料は稲葉能登守からの踏絵借用の延期願いに対する、長崎奉行の返事というものになろうが、借用から返却までは踏絵が厳密に管理されていたことがわかる。それは、踏絵の借用証を長崎奉行所に提出していたことも、理由のひとつにあるだろう。また、この書簡の日付は2月21日となっているが、この頃は臼杵から踏絵を返納する使者を派遣する時期にあたる。そのため、13日に稲葉能登守から長崎奉行に書簡が提出され、約1週間後にその返信が長崎奉行から到着したのである。

イ）岡藩

岡藩の踏絵の借用について、1745（延享2）年12月28日の覚をみると次のようにある（北村清士『大分県の切支丹史料』106頁）。

長崎絵踏御借用、御使者の義、年始御祝儀を兼ねて、私共相勤めて何の差支無御座候へ共、長崎奉行所移りし後にて如何可有御座哉、其段は不存候へども、先年石本安兵衛方より、御奉行所へ御伺ひ、月番へ申来旨、及承申候

踏絵持帰の節は、陸路を仕候付、帰路は日田通り仕候

これにより、岡藩も長崎奉行所から踏絵を借りていたこと。また、長崎への使者は年始祝儀を兼ねて、派遣していたことがわかる。そして踏絵を持ち帰るときは陸路で帰ることから、日田を経由して岡城に戻っていたことがわかる。この覚の日付や年始祝儀を兼ねて使者を遣わしていることから考えれば、臼杵藩と同様に１月初旬には長崎奉行所から踏絵の貸与を受けたものと思われる。

３．絵踏みの実施

ア）臼杵藩

臼杵藩での絵踏みは1月23日から始められる。臼杵藩の場合は、武士から絵踏みをおこない、その後、町人へうつることになる。1月23日に臼杵城下（臼杵町）からおこなわれ、27日まで各家をまわり、家族全員に絵踏みしていた。踏むときは「足袋等差踏」とあるように、足袋を着用している。これはシーボルト「NIPPON」の絵踏みの様子と同じである。城下で士族の絵踏みが終わると、次は町方、村方でおこなわれることになる（『豊後切支丹史料』336頁、二月の項抜粋）。

一朔日町踏絵小頭一人卯ノ半刻宗門御櫓江絵板為受取、警固御足軽一人召連罷出ル、町触番之年寄町夫召連罷出絵板為持候事

一二日之朝三日より在中江出候ニ付、御月番江宗門奉行同下役之小頭同道ニ而罷出ル尤御破損方江茂罷出ル

一宗門御改踏絵之義組之者ハ小頭宅ニ而為踏以後支配宅ニ而為判形自分義見届（中略）

一踏絵之節二十三日以後組之者召置候節、御書付ヲ以召置候段宗門方江小頭持参候而相達候事

これによれば、2月1日に町で絵踏みするために、6時頃から宗門櫓で絵板を受け取らせ、警固のために足軽を一人連れて出た。町の触番年寄、町夫を召連れて絵板を持参した。2日の朝か3日から村々に出ることになるので、月番に宗門奉行、同下役の小頭と一緒に出て行った。宗門改めにおいて組に所属するものは、小頭宅にて絵踏みをおこなう。絵踏みは23日以降、組の者を呼び寄せ、書付により宗門方へ小頭が持参して報告することとある。

これらにより、町方では2月1日から始められていることがわかるが、その順番も決まっている。1番から8番まで定められており、本町→横町→田町→掛町→濱町→唐人町→新町→畳屋町の順番でまわっている。村方では3日から絵踏みがはじめられ、22日までおこなわれていたことがわかる。村々を廻って絵踏みをするときは、宗門奉行二人、同下役二人、小頭、足軽、人足馬など率いて巡回されていたことを別の資料からも確認できる。

このように、臼杵藩では1月下旬に踏絵を貸与してから、2月下旬には絵踏みを終らせていた。また、身分別で絵踏みをおこなっており、士分階級や僧侶、社人は、町人・村人と別に絵踏みをしていた。士分階級でも職責ごとにおこなわれており、改役が各組頭の役宅を訪れておこなっていたものと考えられている。もし輩下が江戸で在勤していた場合は組頭が江戸在勤の由を帳面に記入していた。そして病気の者に対しては、改役がその自宅に訪れて、病床中の病人の足へ踏絵をあてた上で署名捺印させた文書を提出している。軽い病人には、寄場を設けて、ここに集まらせて絵踏みをさせていたのである。

イ)岡藩

岡藩の絵踏みの実態について、1664(寛文４)年の史料をみると次のようにある(『大分県の切支丹史料』59頁)。

切支丹宗門御改に付当年より始めて、侍中同妻子、下々町中医師、寺社方家内迄不残踏絵を渡しふませ申候。年寄共家々銘々に壱枚宛請取、妻子其外家内不残踏せ申候事

宗門改めとして1664(寛文4)年からはじめて、侍とその妻子、町中医師、寺社方、家内まで残らず踏絵をふませるようになっていることがわかる。また、年寄たちはそれぞれ踏絵を一枚ずつ受け取り、妻子、そのほかの家内のものまで残らず踏ませることとある。

ここではじめて、領民全てに絵踏みが実施されるようになったことがわかるとともに、年寄役に踏絵を一枚ずつ渡していた実態がうかがえる。ここでの踏絵は、岡藩独自で作っていたもの(板踏絵)であり、これは1672(寛文12)年に回収されることとなる(『続豊後切支丹史料』385頁)。

板ニ書申候切支丹之踏絵先年より在々手元庄屋手前ニ一枚つゝ渡置毎月百姓共ニ踏せ申候、然共向後ハ不入義ニ存候、万一板ニ書申候〇之事御改所御さつと被成候へハ、如何ニ御座候而悉奉行共手前ニ取集候て箱ニ入御城之御倉ニ納置可然奉存候

これによれば、板に書いた切支丹の踏絵は、先頃から村々の庄屋の手元に一枚ずつ渡し置き、毎月百姓たちに踏ませていた。しかしながら、今後は板踏絵を使うことはなくなった。もし板踏絵があったならば、早急に全て奉行たちのところに集めて、それらを箱に入れて城中の倉に納め置くようにとある。

これから村々では庄屋に一枚ずつ板踏絵を渡していたことがわかるが、それは毎月絵踏みをしていたためである。これが回収されて、その代わりにつかわれるようになったのが長崎奉行所の真鍮踏絵ということになる。

年始祝儀の使者が借りてきた踏絵は、長崎から戻った翌日から順次、使われる。その手順については1745(延享2)年の文書で次のことが確認できる(『大分県の切支丹』106頁)。

一踏絵改之義は長崎より帰着仕候、翌日より段々為せ踏申候。先年は在中見分、先に仕り候へ共、在中差支申候に付、近年は町見分を仕り夫より、御家中廻り絵、御家人見分、夫より在中廻り仕候

以前は、村方から先に絵踏みをおこなっていたが、支障をきたすということで、最近では町中から絵踏みをおこなっている。その次に家中、家人、最後に村方という順番となっている。村方では2月3日から20日まで岡藩南部でおこなわれた記録もあり(『豊後キリスト教史』18頁)、ここでは「長崎より御借寄の踏絵」が使われている。南部と北部で廻っていたので、長崎奉行所から借用した踏絵は各1枚(計2枚)ということになる。周知の岡藩の踏絵鋳造事件でも、長崎奉行は踏絵を2枚貸与しており、一藩2枚が原則だったと考えられる。

先に府内藩は春と秋に二度の宗門改めがおこなわれていたことを指摘したが、岡藩でも次の史料により秋にも実施されていることがわかる。

如去秋踏絵並書状を御廻し、面々家内不残御ふませ、不審なる者共の、有無名の脇に被書付、踏み申す月日、書記、名の下に判形可有候。此廻文は留より中川平右衛門様へ御戻最に奉存

これによれば、去年の秋の踏絵ならびに書状を回覧し、家内残らず絵踏みさせ、不審者たちの有無を名前の脇に書き付けるようにとある。絵踏みの月日を記し、名前の下に判形するようにとある。これは中川平右衛門に提出するようにとされた。上記の文より、岡藩でも宗門改めとして、秋にも絵踏みを実施していたことがわかる。

町では、乙名方四ヶ所と使者屋で絵踏みがおこなわれている(乙名２ヶ所、使者屋3ヶ所でもよい)。家中の場合は、中小姓格と御徒士坊主を一緒におこなう。扶持人の見分の時は、小頭宅、御中間宅、馬屋でもおこなっていた。ここだけでも5～6日、短縮しても3～4日かかっていた。そして、絵踏みが終わったら5日以内に、それぞれから家老に文書を提出しなければならなかった。

おわりに

長崎奉行所が1669(寛文9)年に萩原祐佐に真鍮踏絵を製作させて以降、これを貸借して絵踏みをすることが徹底された。宗門改めが長崎奉行のもとで一元化されたことを意味しその結果、九州、ことに豊後国での絵踏み形態は大きく変化することになる。当初、豊後各領で使われていた藩独自の板踏絵は、城中の蔵に収められることとなり、長崎奉行所から借りた2枚を以って絵踏みを展開していかなければならないために、非常に手間と時間を要することになった。岡藩でおこった「踏絵鋳造事件」は、藩領のこうした事情を反映した結果である。

さらに、キリシタン露顕(崩れ)も豊後の絵踏み形態に変化をもたらせている。当初、町人、村人を中心におこなわれていた絵踏みが、武士や僧侶などを含めた悉皆実施となっているのは度重なるキリシタン検挙のためであろう。さらに、春・秋2度にわたり宗門改をおこなっているのもその顕著なところである。

この一方で、町から村方という絵踏みの実施方法は、長崎などと共通するところである。しかし、五島藩では領民からはじめて最後に福江家中での絵踏みをもって「踏絵行事」は終了していたが、臼杵藩では逆の行程だったことがわかる。また、五島藩、臼杵藩、岡藩ともに祝儀使者を兼ねて踏絵を借用していることは共通している。長崎を含めて、一種の正月行事として絵踏みが定着していたことが大きな理由といえよう。

五島藩と府内藩・臼杵藩・岡藩の絵踏みの概念を比べると、五島藩がより絵踏みを行事的行為とみなしていることが看取される。一方、豊後国諸藩は、禁教の概念のもとでおこなう行政的政策として実施する姿勢が強かったことがわかる。そして長崎奉行の管理・監督のもと実施された絵踏みは、作法や実施形態はその藩独自のやり方に委ねられていた。こうした絵踏みの厳正な実施と、踏絵の管理は、キリスト教禁教政策のあり方と幕藩制支配の態様を如実にあらわしているのである。

参考文献
マリオ・マレガ『豊後切支丹史料』(サレジオ会、1942年)
マリオ・マレガ『続豊後切支丹史料』(サレジオ会、1946年)
大分市史編纂審議会『大分市史』(双林社、1955年)
北村清士『大分県のキリシタン史料』(自費出版、1960年)
片岡弥吉『踏絵』(ＮＨＫブックス、1969年)
大分県総務部総務課『大分県史』近世編４(大分県、1983年)
大分県立先哲史料館『豊後キリスト教史』(大分県立先哲史料館、2001年)
拙稿「五島のキリシタンと禁教政策」(西南学院大学大学院国際文化研究科(代表髙倉洋彰)『キリスト教文化の東方伝播とその展開』西南学院大学教育・研究推進機構、2010年)

謝　辞

本展覧会開催ならびに図録編集にあたり、ご指導いただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

（個人）
大津　祐司
五野井隆史
勝盛　典子
讃岐　和夫
武富　雅宣
中西　武尚
平川　　毅
村上　久和
山下　俊雄
安田　晃子
吉田　　寛

（団体）
大分県立歴史博物館
大分県教育庁埋蔵文化財センター
大分市教育委員会
大分市歴史資料館
神戸市教育委員会
神戸市立博物館
津久見市
津久見市教育委員会

（五十音順、敬称略）

講 演 会

◎第7回　特別展関連公開講演会

2010年6月26日（土）

第1部　14：00 ～ 14：30

安高啓明氏（本学博物館学芸員）

「大分に残る南蛮文化」

第2部　14：30 ～ 16：00

五野井隆史氏（東京大学名誉教授）

「豊後キリシタンの盛衰」

主な参考文献

大分市歴史資料館『豊後キリシタン史　ヨーロッパ文化との出会い』（1989年）
津久見市『宗麟と南蛮文化－津久見市収集10年の精華－』（1996年）
大分県立先哲史料館『豊後キリスト教史』（2001年）
大分市歴史資料館『豊後府内　南蛮の彩り－南蛮の貿易陶磁器－』（2003年）
大分市美術館『ザビエル・宗麟・キリスト教　南蛮文化の精華』（2004年）
中世大友再発見フォーラム『南蛮都市・豊後府内　都市と交易』（大分市教育委員会・中世都市研究会、2001年）
大分市史編さん委員会『大分市史』中・下巻（大分市、1987・1988年）
大分県総務部総務課『大分県史』中世篇Ⅲ（大分県、1987年）
大分県総務部総務課『大分県史』近世篇Ⅳ（大分県、1990年）
竹本弘文『大分県先哲叢書　大友宗麟』（大分県教育委員会、1995年）
加藤知弘『ザビエルの見た大分』（葦書房、1985年）

■出品目録

番号	資料名		数量	時代	所蔵先
1	大友宗麟画像（複製）	Portrait of OTOMO Francisco Sorin (REPLICA)	1	安土桃山時代	津久見市
2	大友宗麟官途状	Identification of appointment by OTOMO Sorin	1	安土桃山時代	津久見市
3	短統（複製）	Short gun	1	安土桃山時代	津久見市
4	大友府蘭（義鎮・宗麟）書状（複製）	Letter of OTOMO Francisco Sorin (REPLICA)	1	安土桃山時代	津久見市
5	天正遣欧使節肖像（複製）	Portrait of the delegation of Tensho youngsters	1	安土桃山時代	津久見市
6	府内古図	Old map of Funai	1	17～19世紀	大分市歴史資料館
7	府内古図	Old map of Funai	1	17～19世紀	大分市歴史資料館
8	府内病院想定復元模型	Imaged model of Funai Hospital	1	−	大分県立歴史博物館
9	聖フランシスコ・ザヴィエル像（複製）	Portrait of St.Francisco Xavier (Replica)	1	江戸時代初期	津久見市
10	オルテリウス「アジア図」	Map of Asia by ORTELIUS	1	1570年	大分市歴史資料館
11	オルテリウス「東インド諸島図」	Map of The East Indies of ORTELIUS	1	1570年	大分市歴史資料館
12	テイセラ「日本図」	Map of Japan by L .TEIXEIRA	1	1595年	津久見市
13	メルカトル「アジア図」	Map of Asia by G.MERCATOR	1	1595年	津久見市
14	鉄地筋金象嵌桃形兜（南蛮兜）	Namban-style helmet	1	桃山時代／16世紀末～17世紀初	大分市歴史資料館
15	象嵌南蛮人文鐙	Stirrup with Namban figure design in inlay	1	安土桃山～江戸時代初期	津久見市
16	南蛮人図鏡	Mirror of Namban figure design	1	桃山～江戸時代初期	大分市歴史資料館
17	織部煙管	Long pipe (Oribe ware)	5	安土桃山～江戸時代初期	津久見市
18	南蛮船文鐔	Sword guard with Namban ship design	1	江戸時代	津久見市
19	南蛮船図鐔	Sword guard with Namban ship design	1	江戸時代中期／17～18世紀	大分市歴史資料館
20	洋風文字龍文鐔	Sword guard with Western-style letter and dragon design	1	江戸時代	津久見市
21	洋風文字龍図鐔	Sword guard with Western-style letter and dragon design	1	江戸時代中期／17～18世紀	大分市歴史資料館
22	十字透かし鐔	Sword guard with cross design	1	江戸時代	津久見市
23	十字と葡萄図鐔（南蛮鐔）	Sword guard with cross and grape design	1	江戸時代中期／17～18世紀	大分市歴史資料館
24	指輪	Ring	1	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
25	コンタ	Contas (Rosary)	2	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
26	メダイ	medal	1	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
27	メダイ状金属製品	Medal-shaped metal product	5	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
28	中国青花皿	Excavated remains at Otomo Funai town (Porcelain,china)	2	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
29	中国翡翠釉菊花文小皿	Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics,china)	2	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
30	タイ陶器四耳壺	Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics,Thailand)	2	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
31	タイ練上手クンディー	Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics,Thailand)	1	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
32	タイ鉄絵合子蓋	Excavated remains at Otomo Funai town (Ceramics,Thailand)	1	16～17世紀	大分県教育庁埋蔵文化財センター
参考	南蛮屏風画像	Namban Screens	1	桃山時代／16世紀末～17世紀初	神戸市立博物館

西南学院大学博物館　2010年春季特別展

九州のキリスト教シリーズⅡ
南蛮の鼓動 －大分に残るキリシタン文化－

編　　集　安高啓明
編集補助　小林史奈、貞清世里、中尾祐太、中松沙織
　　早瀬遼子、平川知佳、吉村陽子
発　　行　西南学院大学博物館
　　〒814－8511　福岡市早良区西新3丁目13番1号
　　電話092－823－4785
発 行 日　2010（平成22）年5月27日
印　　刷　株式会社 インテックス福岡

西南学院大学博物館

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM

URL www.seinan-gu.ac.jp/museum/

西南学院大学